

ラーダークリシュナン博士・哲学高等研究所

設立の意義

中 村 元

哲学は何人にとつても必要な学問であり、人間が生きている限り、不可欠であるが、また最も冷遇されている学問である。大学の一部で研究はされているが、独立の哲学研究所となるものは、欧米にも日本にも存在しない。

かつてインドではヴェーダーンタ思想家であるマルカニ(Malkani)博士がマハーラーシュトラ州で哲学研究所を主宰していた。博士はヴェーダーンタ哲学の原典研究者というよりは、むしろこの哲学にもとづいて自己の哲学説を展開していた人であり、インドのみならずアメリカの哲学者たちのあい

だで注目されていた。しかし博士の歿後、ボンベイ大学に合併されてしまった。こういう事情を考えると、大学の一部分ではあるけれども、「ラーダークリシュナン博士・哲学高等研究所」の意義は大きいと思われる。

一九八〇年三月末にわたくしはたまたまこの研究所で、シユリー・オーロビンダ記念講演 (Sri Aurobindo Memorial Lectures) を三回行った。それはインドの文部省のような大学

委員会 (University Grants Commission) が主催して一九七二年以来インド人の学者に依頼してオーロビンダ記念として哲学講演を行っていたが、今回は第五回目のそれとして外国人であるわたくしに依頼することになり、たまたまその開催会場がマドラスのこの研究所となつたので、わたくしはつぶさに見学することができた。

この研究所はもともと、南インドの文化を促進するため、一九二七年九月にマドラス大学の哲学科として出発した。

その趣意書によると、半島にのみ閉じこめられることのないように、その学科の企劃に広い展望を与えようということをめざしたのである。そこでヴェーダーンタや Saiva Siddhanta の分野のみならず、サーンキヤやミーマンサーをもジツクリと研究するとともに、政治哲学や観念論 (Idealism) と連関して西洋哲学の研究をも奨励したのであった。研究者たちは英語、サンスクリット語、タミル語の哲学的文献のみな

らず、テルグ語、マラヤーラム語、ヒンディー語で書かれた哲学的文献をも研究することが勧められた。

その成果が挙げたので、インド政府の大学委員会（University Grants Commission）は、一九六四年にマドラス大学の哲学科を哲学高等研究所（Centre for Advanced Study in Philosophy）に昇格させた。一九七六年六月からこのセンターは「ラーダークリシュナン博士・哲学高等研究所」（Dr. S. Radhakrishnan Institute for Advanced Study in Philosophy）と名づけられている。

哲学の方面におけるこのような高等研究所は、かつては他の大学にも設けられていた。シャーンティニケートンやベナレスにおけるものがそれであつた。ところが、予算の関係もあり、現在は廃止されてしまい、マドラスにあるものが唯一のものである。

またかつては、

シムラにも高等研究所があり、哲学などを含めて学者に二年間滞在させ研究に従事させた。それはプリンストンの高等研究所を模範としたものであるが、一向成果が挙げられないので、モラルジ・デーサイ内閣のときに閉鎖してしまつた。そのほか「高等研究所」と称するものは、インドに種々あるが、いずれも他の学問分野に関するものであり、哲学に関しての高等研究所なるものは、これ一つである。

こういう事情を見ると、マドラスにおける哲学高等研究所の存在意義は大きい。そうして「ラーダークリシュナン博士哲学研究所」と改名したのは、賢明であつた。それは、他の類似の機関よりも一段高いものであるとして権威を示すことになるし、またインド政府が簡単に廃止することができなくなるからである。Dr. という称号を挿入しているのは、尊敬の意を示していると考えられる。

この研究所は、単に大学の一研究室であるというにとどまらず、（１）全インド的セミナーを開いて、重要な個別の問題ごとに討議する。（２）国際セミナーを開く。（３）公開セミナーを開く。（４）一九六四年には the Indian Philosophical Congress の第三八回大会を開催した。（５）ユネスコの Project を行なう。（６）大学院での研究を行わせ、学位を授ける。（７）記念講演。（８）客員教授を迎える。（９）世界諸国の学者の講演を開催する。（１０）特別講演。（１１）研究業績の刊行、というようなことを行なつていく。

特に内容の充実した単行本をすでに五三冊刊行し、また Indian Philosophical Annual という雑誌を一〇冊刊行している。また毎年 Year Book を刊行している。その雑誌に掲載されている論文には、ときに意表をつくようなものがある。例えば「ブレンターノとヴェーダーンタ」というような。

その初代の所長は

T. M. P. Mahadevan 博士は、

Advaita の学者として世界的に知られている。

第二代の所長 V. A. Devasenapathi 博士は Saiva-Siddhanta の専門であり、タミル語の詩人や聖者に関する多くの研究がある。総じてタミル・ナドゥ州では、現在ではヴィシヌ教よりも、シャイヴァ・シッターンタ派が優勢であり、この派の書物だけ売っている書店がマドラスにあるほどであるから、この派の哲学の研究をする当事者が輩出するのは当然である。(ただし日本には殆んど知られていない)

第三代の所長は R. Subrahmanian 博士であり、専門は Advaita Vedanta と現象学、実存主義である。著書として

The Elements of Logic (It. author), Madras: S. Viswanathan Publishers, 1958

The Personalistic Existentialism of Berdyayev, Madras: University of Madras, 1970.

The Taittiriyaopaniṣad-bhāṣya-vārtika of Sureśvara, Madras: University of Madras, 1976.

The Mysticism of Poygai Ālvār, Madras: Vedanta Publications, 1976.

Some Problems in the Epistemology and Metaphysics of Rāmānuja. The Dr. Radhakrishnan Institute, 1978.

以下副教授 (Reader) または講師 (Lecturer) の人々の名と

ラーダークリシュナン博士・哲学高等研究所設立の意義 (中村)

専門を挙げると、次のごとくである。

P. K. Sundaram Advaita, 認識論と形而上学

T. P. Ramachandra 応用インド哲学 (Applied Indian Philosophy)

S. Gopalan 社会学、社会科学の哲学、宗教哲学、宗教

社会学、ジャイナ教

V. Ratnasabapathy. Saivism

T. S. Devadoss 現代インド哲学、社会学、政治哲学。

これらの人々の研究領域から見ると、大ざっぱに言つて、インド哲学と西洋哲学とを総合的に研究しようとしていることが明らかである。

この態度は、最近現れたものではなくて、設立当初から目ざされていたものであつた。それはマハーデーヴァン博士が確立したものであるとして、現在のスタッフの人々はたたえている。

文献研究という点ではマハーデーヴァン博士は、恐ろしく伝統主義であり、例えば仏教の影響など顧慮しない。しかしヴェーダーンタ哲学の意義づけ価値評価に、西洋哲学の研究必要性を認めたという点では、極めて進歩的である。

この態度は充分に認められるべきであろう。現在インド哲学の研究なるものが諸国で行われているが、それは実際問題としてハインド哲学に関する文献の研究に終止してい

る面が強く、一般の哲学思想に影響を及ぼすことが稀薄であることを考えると、この研究所設立の意義は大きい。

ただ、ここから何か新しいものが出て来るかどうかは、わたくしには解らない。すでに、かれらが師範と仰ぐラーダークリシュナンに独創的な思想があつたかどうかということになると、疑問である。或るインドの知識人が先年わたくしに感想を洩らしたことがある——「ラーダークリシュナンには独創性が無い。インド哲学を、西洋人に解り易いように紹介しているだけだ。本当に独創的なのは、シュリー・オーロピンドだ！」と。しかし外国人であるわたくしから見ると、ラーダークリシュナンの説いていることはよく解るが、シュリー・オーロピンドの説いていることは、なか／＼理解し難い。

万人に理解され得る道を開いたという点で、ラーダークリシュナンの線は尊重されるべきであろう。そうしてこの研究所の存在意義は充分に認められる。ただし、独創的な思想が大学の研究室から出て来るかどうか、また研究所が産み出し得るかどうかということになると、これは別問題である。後世の人々の批判に俟たねばならぬであろう。

（東方学院院长・文博）

学術大会開催予告

第三十二回学術大会は、昭和五十六年

八月二十六日（水）、二十七日（木）

の両日、同朋学園（同朋大学）
（名古屋音楽大学）に

おいて開催されます。

日本印度学仏教学会